

## 火縄銃の仕組み

初期の鉄砲の多くは、銃身後部の小さな穴から中の火薬に直接炎を当てて発射するものであった。この方法は、据え置き型の大砲には適していたが、携帯型の武器には不向きであった。火縄銃は、サーペントインと呼ばれるバネ仕掛けのアームを取り付けることで、照準や射撃を容易にした。サーペントインには火のついた火縄が入っており、砲手が引き金を引くとアームが前に飛び出して、火薬を入れた皿に点火する。この閃光が銃身内の主火薬を爆発させ、弾が発射される。

この火縄銃の基本設計には多くのバリエーションがあり、日本の鉄砲職人も独自の工夫を凝らしている。多くの技術がそうであったように、より複雑なものはより多くの機能を備えているが、高価で維持が困難であった。